

日本アメリカ史学会第 43 回例会記録

日本女子大学目白キャンパス

2018 年 12 月 22 日（土）

「初期アメリカ史研究の新潮流」

報告

笠井俊和（群馬県立女子大学）

「初期アメリカの船員と貿易の社会史」

鰐淵秀一（共立女子大学）

「17、18 世紀デラウェア溪谷における植民と環境—帝国の役割に着目して—」

コメント

小塩和人（上智大学）

高橋均（東京外国語大学）

司会

兼子歩（明治大学）

本研究会では、博士論文の提出後、あるいは執筆中の気鋭の若手研究者によって、初期アメリカ史研究の最前線にある 2 つの報告が行なわれた。笠井氏は、2015 年に名古屋大学に提出した博士論文を発展させ、2017 年に『船乗りがつなぐ大西洋世界：英領植民地ボストンの船員と貿易の社会史』（晃洋書房）を出版している。

笠井氏の研究は、海上における人間社会のあり様を描き出すものである。そして、その独自性は、海事裁判記録のほか、船の出入港を記録した海事局船舶簿や植民地で発行され

た新聞など幅広い史料を駆使して既存の歴史像に修正を迫ったことにある。本報告で再解釈が提示されたのは、荒くれ者として描写されることが多い船員の性格、マーカス・レディカーの研究にあるような労働者として船長に対抗する船員像、そして、三角貿易へのボストン船の関与の3点である。

1点目に、船員が訴訟を起こすのはその荒くれ者としての性格に帰すべき事柄ではなく、身の回りの環境に大きく影響を受けることが明らかになった。航海日数や船のサイズ、乗組員の人数が大きく（多く）なるほど訴訟数が多くなる傾向がみられたのである。そして2点目に、ボストン船の乗組員は1隻あたり10人足らずと小規模であり、乗組員が一団となって船長に抵抗するような状況になかったことがわかった。さらに3点目に、ボストン船は特定の目的地とのシャトル貿易を行ない、三角貿易はごく一部の船に限られることが明らかとなった。また、その貿易において船員が情報伝達の役割を果たし、1740年代までは「イギリス化」、それ以後は本国からの離反に関与したという。

鰐淵氏の最大の問題意識は、環境史と帝国史の接合にある。1970年代以降の環境史研究は、ウィリアム・クロノン（『変貌する大地』）のように、経済史における市場革命論とそれへの自然環境の包摂が議論されてきた。ただ、環境変化の原因には、植民のパターンを方向づけた帝国の政治経済的諸要因として、イデオロギーや制度、ネットワークや科学知識を考慮に入れる必要があるという。

デラウェア渓谷に関する先行研究は、イングランド以前にオランダやスウェーデンが入植をしていたことを視野におさめ、ウィリアム・ペンが多民族の共存と寛容をうたうペンシルヴァニア植民地を建設したという〈ペン中心史観〉からの脱却を進めてきた。本報告もその潮流に沿っており、オランダとスウェーデン、そしてイギリスの帝国のビジョンの相違が検討された。オランダは先住民との毛皮交易や捕鯨基地としての植民地経営に関心があり、スウェーデンは毛皮交易とタバコ栽培を計画していたものの人的、財政的リソースの不足に悩まされていた。これらに対しイギリスは航海法体制下において植民地の気候を利用した輸出向け作物の栽培を計画していた。そして、大西洋市場での穀物需要の高まりはコムギの耕地拡大を進め、土地の「改良」においては商業ネットワークのもとにヨー

ロッパ産クローバーが植えられ、急激な開拓が招いた土地の劣化への対策も植民地政府を通じて進められ、農業技術は印刷・手稿本によって農民のもとに広まった。このように、デラウェア溪谷において、それぞれの帝国による異なる開発の可能性が追求され、異なる結果が生み出された。植民を通じて穀倉地帯へと変容したのは、地理的な必然ではなく、帝国の政治経済的要因によるものだったのである。

環境史を専門とする小塩氏は、両報告で初期アメリカ史の時代の区切りとトランスナショナルな場としての海の重要性が問われていると述べたうえで、本国との関係性や環境決定論的か否かについての立場が両報告で対照的であると指摘した。また、個別の報告に関する質疑応答は、当初の予定だった増井志津代氏（上智大学）からのコメントの代読というかたちでも行なわれた。笠井氏は、情報伝達においてつなぐ役割を果たしていた船員のエージェンシーについては船長の存在が圧倒的だったこと、デフォーやメルヴィルなどの船員ナラティブとの関係性についてはそのような小説以前に難破譚が人気ジャンルとして定着していたことを回答した。鰐淵氏に対しては政治経済という語の定義のあいまいさや、ペンとトマス・ハリオットの農学的な入植構想の類似が指摘された。

中南米史が専門の高橋氏は、笠井氏に対し、シャトル貿易の零細性を脱却したのはいつ頃でその際に社会的地位や政治的発言力にどのような変化が生じたのかについて、18世紀メキシコの鉱山業を例にとって質問した。また、鰐淵氏に対しては、南北アメリカ大西洋岸の植民地では作物を作る場合に比較的環境を選ばない作物や現地作物の栽培を主産業にするのが一般的であったことから、デラウェア溪谷での大規模栽培にヨーロッパからコムギを導入したことに技術的困難はなかったのか、困難があったとすればどのように克服されたのかについて質問した。笠井氏は、建国後に船の大型化によって技術が高度化し、船員が一生をかける職業になったこと、そして政府に対して請願をする場合もあったこと、鰐淵氏は、大々的にコムギの栽培を展開する前にペンらが個別に農業の実験をしていたことを指摘した。

フロアとの議論において、笠井氏は、先住民やアフリカンの不自由労働者について、史料から読み取る限りその数は多くなく、白人の若者で労働力をうめる場合が多かったとの

印象を述べた。鰐淵氏は、イギリスの開発構想自体も時代とともに変化していたこと、例えばデラウェア溪谷でのコムギと初期ヴァージニアでのタバコという栽培作物の相違は環境ではなく時代の違いに由来することを確認した。また、両報告に共通して、西インド諸島と本土植民地の発達に関連性が議論された。

最後に、本記録者が繰り返すまでもなく、近年の初期アメリカ史研究では、帝国や大西洋世界の複層的な大きな枠組みのなかにアメリカ植民地を位置づけ、ナショナルな壁を超えた視座からの分析がなされている。両報告は、大西洋史（アトランティック・ヒストリー）と帝国における政治史・経済史という、近年定着あるいは見直しが進んでいるアプローチをとるなかで、広く受け入れられてきた歴史像に修正を施している。また、船員の性格のような史料が直接的には語っていないものや自然環境といった非人間へと研究対象を広げ、様々な要素の織りなす世界とその変化を描き出す努力がなされている。

（文責 塚田浩幸 東京外国語大学・院）